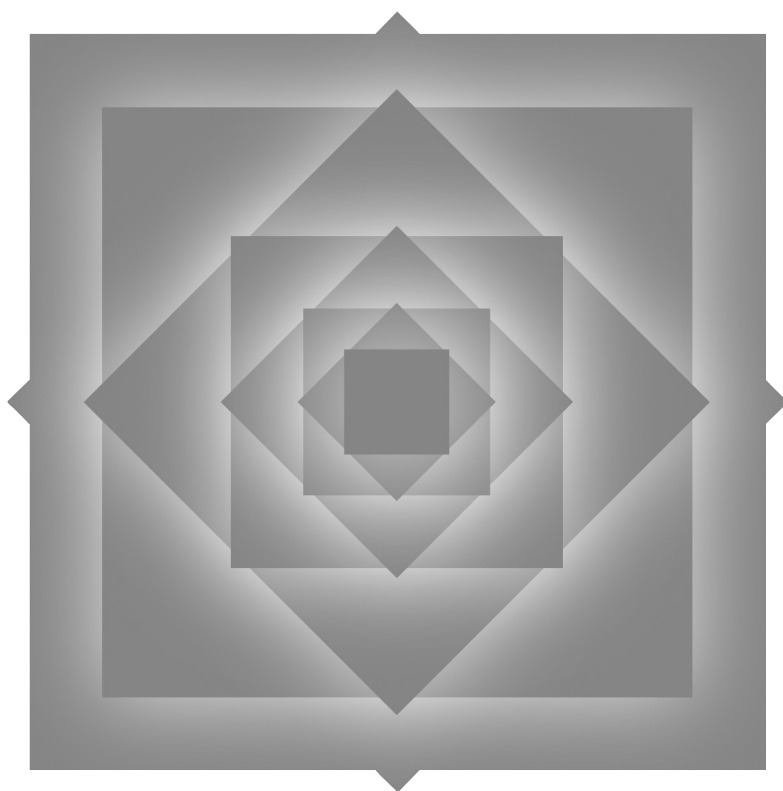


会社の数字解析の基本ルール



儲かる会社にするための経営課題を 数字での確にとらえよう

はじめに素朴な質問をします。あなたは、会社の決算書を読んでいますか？——もちろん見たことはあると思いますが、その内容を詳しく読み、ていねいに分析している人はそれほど多くはなさそうです。貸借対照表や損益計算書に代表される決算書は、経営情報の宝庫と言われますが、その情報を上手に活用できていないのが実情のようです。

このテキストは、これまであまり決算書になじみのなかった初心者を対象に、基幹社員なら誰もが知っておかなければならない会社の数字解析(経営分析)の基本を紹介したものです。とにかく、基本事項をわかりやすく理解していただくことをねらいに、初歩の初歩から解説しました。できるだけ具体的な数値例で説明していますので、紙と鉛筆を用意し、実際に計算をしながら読みすすめてください。

この分野は細かな数字と専門用語にうんざりさせられます。そこで数値例はできるだけ簡潔なものとし、用語は図解を中心に概念を身近にとらえられるように工夫しました。また、実務的に必要最低限の知識の理解をねらいにしていますので、一部理論的な厳密さよりもわかりやすさに重点を置いたところがあります。

会社の数字解析(経営分析)の目的は経営の実態をきちんとつかむことですが、真のねらいは儲かる会社にするための経営課題を数字での確にとらえるところにあります。会計(アカウンティング)はビジネスの言葉と言われます。このテキストで決算書の読み方の基本を確実に身につけ、ビジネスの大きな成果につなげていただくことを期待します。

このたび改訂の機会を得ましたので、会社法の施行や会計基準の変化などに合わせて内容を全面的に見直すとともに、加筆修正しました。さらに使いやすく、読みやすくなっているものと確信します。

目次

はじめに	3
第Ⅰ章 会社の数字解析の考え方とすすめ方	5
1. 決算書は経営情報の宝庫	6
2. 決算書はどのようにつくられるか	9
3. 会社の数字解析の目的とねらい	16
4. 的をはずさない数字解析のすすめ方	17
●研究課題Ⅰ	19
第Ⅱ章 貸借対照表(B/S)の読み方	21
1. 貸借対照表を分解してみよう	22
2. 資産・負債・純資産の中身は何か	24
3. 貸借対照表を読むポイント	30
4. 貸借対照表の構成を探る	37
●研究課題Ⅱ	39
第Ⅲ章 損益計算書(P/L)の読み方	41
1. 損益計算書は一定期間の会社の成績表	42
2. 損益計算書の構造を理解しよう	44
3. 損益計算書を身近なものにする	48
4. 損益計算書から収益性を読みとる	51
●研究課題Ⅲ	57
第Ⅳ章 会社の現状の正確なとらえ方	59
1. 基本は儲かっているかどうかの評価	60
2. 時系列で会社の数字を解析する	61
3. ライバル会社との比較で実力を見る	65
4. 見えにくい人件費などのとらえ方	67
5. 決算書に表れない会社の実力	72
6. 会社法と新会計基準のインパクト	74
●研究課題Ⅳ	76

第 I 章

会社の数字解析の 考え方とすすめ方



会社の数字を読むということは、決算書を正しく読み、
それにもとづいて数字の解析（経営分析）を行い、
収益改善につながる情報を得ることです。

この章では、その導入として決算書がどのようにつくられるか、
簿記の仕訳の基本から一通りの知識を学ぶことにしましょう。
すべての取引は、資産・負債・純資産・費用・収益のいずれかの
勘定グループの組み合わせによって表されることを理解してください。
この基本がわかると、あとの学習がぐっと楽になります。

1

決算書は経営情報の宝庫

1 決算書は経営活動の羅針盤

企業活動

企業活動には実にいろいろな人がかかわりを持っています。経営者、管理者、従業員は言うに及ばず、株主、金融機関、税務署、労働基準監督署、取引先、地域社会などそれぞれの立場で、企業活動に関与しています。

そうした企業活動を継続していくことは、決して容易なことではありません。好不況の波を乗り越え、なんとかやっていかななくてはなりません。そのような意味で企業活動を行っていくには、現在の経営状態がどうなっているのか、どういう方向に向かっているのかなどを、常に正確にとらえていかなければなりません。こうした企業活動を行っていく上での羅針盤のような役割を果たすのが、**決算書**です。

決算書

この決算書に表れている数字をいろいろな角度から見れば、会社の経営の状態がはっきりととらえられます。

一般に決算書と呼ばれているものの代表が次の2つです。

損益計算書
(P/L)

一つは一定期間(通常は1年間)にあげた売上高とかかった費用、差し引いた利益がどのくらいを示す**損益計算書**です(P/L: Profit & Loss Statement とも言います)。もう一つは一定時点(たとえば決算日)に、会社としてどれくらいの資産と負債及び純資産があるかを示した**貸借対照表**(B/S: Balance Sheet とも言います)です(図表 I・1)。

貸借対照表
(B/S)

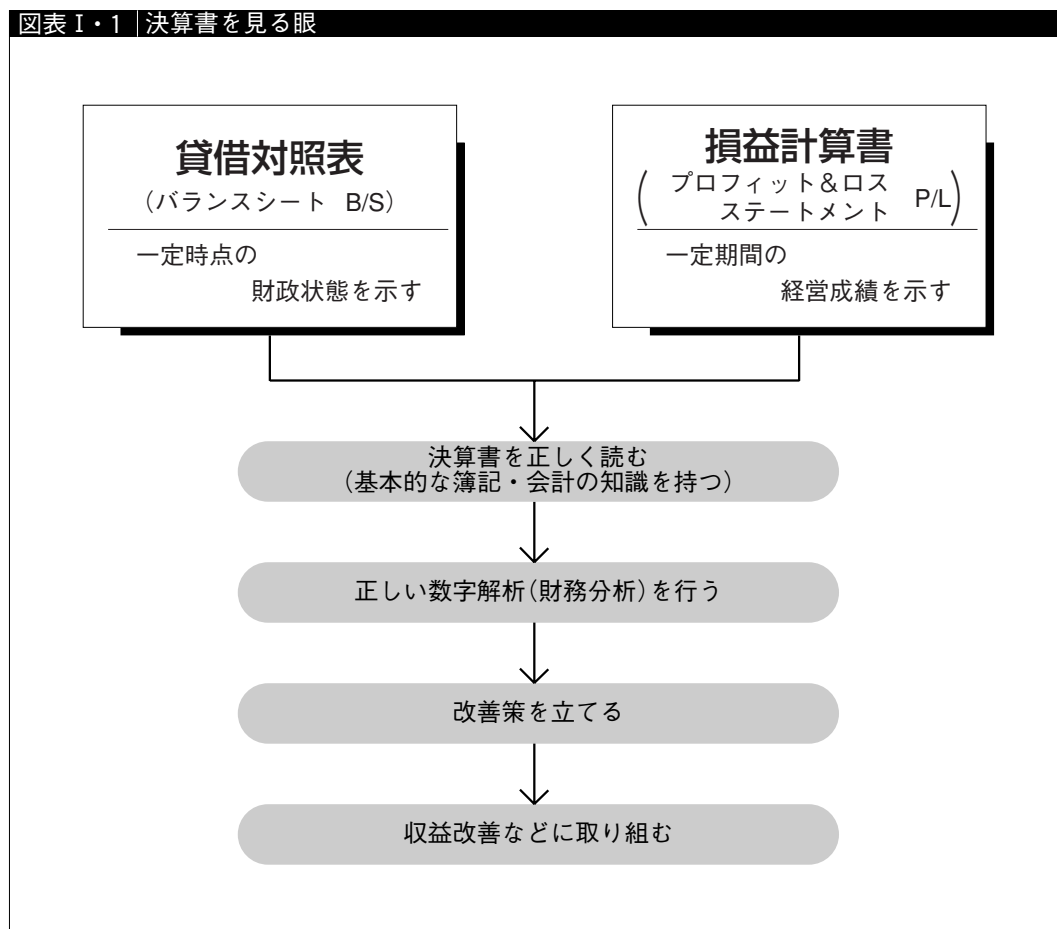
詳しい内容については後の章に譲るとして、この決算書は会社の経営情報を示す宝庫です。

2 数字解析(経営分析)の視点

ステークホルダー

決算書作成の目的はさまざまですが、企業を取り巻く利害関係者(ステークホルダー)に対するディスクロージャーが第一義と言っていいでしょう。そうすると、会社ごとに決算書の作成基準が違っては不都合が

図表 I・1 決算書を見る眼



起こります。どの会社の決算書も同じ用語、同じ様式で作成されていなければ、比較も分析もできません。

このような問題が生じないように、決算書は法律にもとづく一定のルールに従って作成されています。このルールを定めているものが**会社法**です。決算書は通称で、会社法では**計算書類**という言い方をします。貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、個別注記表の4つの表が会社法の計算書類です。

会社法
計算書類

ところで決算書作成の準拠する法律はもう一つあります。**金融商品取引法**です。金融商品取引法では、計算書類ではなく**財務諸表**と呼び、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、附属明細表の5つの表の作成を義務づけています。

金融商品取引法
財務諸表

証券取引所に上場している会社は、金融商品取引法によって財務諸表を作成しており、その全容が「**有価証券報告書**」の形で情報公開されて

有価証券報告書